《解説》

磯部加代子

「ロジン」(Rojin)と「告白者」(İtirafçı)、この二つの悲しみと狂気に彩られた物語は、トルコの小説家スザン・サマンジュ(Suzan Samancı　一九六二年、ディヤルバクル生まれ)が二〇〇一年に発表した短編小説集『沈黙の陰で』(Suskunun Gölgesinde, 二〇〇一年)に収められており、原作はトルコ語で書かれている。

著者のサマンジュは、一年の半分をスイスのジュネーヴで、残りの半分をトルコのディヤルバクルで過ごしながら、トルコ語とクルド語でクルディスタンに生きる人々を描く作品を発表し続けている。

叶わぬ恋、親の言いなりの結婚、貧困、コルジュ(村落防衛隊)に支配される村、コルジュによる若い娘へのレイプ、家族の名誉を汚した娘を殺すことで自らの名誉を守ろうとする家族(の男たち)。「ロジン」という作品が描こうとしたのは、新聞の三面記事に掲載されるような「名誉殺人」という事件だけではない。

「ロジン」は、クルディスタンの、そしてクルディスタンに生まれし者たちの身に起こりうる悲劇の総体を描こうとしているのである。村がコルジュに襲われることも、娘がコルジュにレイプされることも、その果てに妊娠しても娘を救えない母親の無力さも、故郷を追われディアスポラとなった一家の無念も、すべてクルド人の身に起こりうる悲劇なのである。

コルジュとは、直訳すれば「守り人」という意味であり、国家によって武装化された一般市民を指す。PKK(クルド労働者党)の攻撃から市民を守るという名目で発足したが、実際には「クルド人によるクルド人抑圧」をシステム化した暴力装置の別の名である。一般市民に「お金と武器という甘い蜜」を吸わせ、クルド人同士を反目させるのに大いに役立っている。

ロジンという名は、クルド人の女性の名前としてはおそらく最もポピュラーな名前のひとつだ。この短い物語に「ロジン」というタイトルが冠せられたのは、ロジンの身に起きた出来事が、クルディスタンに生きる者(特に女)になら誰にでも起こりうる出来事のメタファーだからだろう。

この物語の構造上の特徴は、物語の骨格であるロジンの物語が第三者への語りとして描かれている、という点である。

この物語を読んだとき、枠物語のほうにせよ、ロジンの身に起きた物語にせよ、まるでどこかで聞いたことがあるような、どこかなじみのある話だと思った。小説の題材としては典型的すぎるのだ。故郷を追われ慣れない大都会で非熟練労働者として働かざるをえない人々、家では威張りくさっているのに都会に出れば卑屈になる夫、「名誉」を重んじる男たち、満足に病院にも通えない女たち……。クルディスタンの形容としては典型的すぎる、ある意味「ありきたりな」物語の中で、一番のひっかかりは、なぜ、ロジンの母は語ったのかということだ。しかも、作家である家の主人に?

もし、この男性作家とその妻の人格や立場がひっくりかえっていたらどうだろう? そして、ロジンの母が語る相手が妻のほうで、妻こそが作家だったら? 考えてみると、それはあまりにも予定調和的であり、出来すぎている。もし、サマンジュを模したようなフェミニストが聞き役なら、私たちはロジンの物語を、安心して忘れてしまうだろう。

「なぜ」の答えは簡単には見つからない。見つからないながらも、訳者にとってこの物語が記憶に刻まれたのは、主人公が語っ

た内容よりも、語った場面と語った相手が、語られた内容に比べてひっかかりがあったからだ。

「私たちの抱える厄介事っていうのはこういうことなんですよ、作家先生」

最後のこの一文に答えがあるのではないかと、何度も反芻してみる。主語が一人称複数形の「私たち」であるのは、「私たち一家」という意味でもあるし、「クルディスタンに生きる私たち」という意味でもあるだろう。強調するように、Yazar（作家）Bey（男性のファーストネームの後に付ける敬称）と、大文字で書かれた、「作家先生」という呼びかけに込められているのは、「あなたは三面記事に書くか、小説に書くかして、私たちのこの出来事を文字にするのでしょう？」「あなたの抱える厄介事とは随分種類が違うでしょう？」という厭味、なのだろうか。事実、サマンジュはこの物語を小説として描いたではないか。

新聞に記事が出たといって夫にしたたか殴られたのだから、ロジンの物語が世間に知れ渡れば、また自分が夫から暴力を受けることになるということがわかっているはずなのだ。それでも、打ち明けるよう優しく促す家の主人に話して聞かせたのは、どうしてなのだろう。

彼女の最後の一言から受ける印象は、クルディスタンからやってきたこの一家と、作家（やその妻）との間の埋めようもない距離感だ。なぜ語ったのかの答えは出ないにしても、語ってもなお、いや、語ったからこそ見えてくる彼我の距離こそ、サマンジュが描きたかったものなのだろう。

他にも小さな疑問は尽きない。ネチルヴァン逮捕の理由は？ フュソは逮捕されるのか？ ロジンの父はイスタンブルでは何の仕事をしているのだろう？ そして一家は故郷へ、ロジンの記憶が詰まった故郷へと、帰るのだろうか？

たった数ページの、しかしクルディスタンの多くのエキスが詰め込まれた物語は、読む者に多くの余韻を残す。ロジンとロジンをめぐる物語が読者の中でわだかまりとなり、記憶に刻まれる。

「告白者」の主人公は、友人ベリヴァンにそそのかされて山に入ったはいいが、後悔して降服し、おそらくは密告して自由の身となった、若い女性である。

「告白者」とは、クルド人にとって「裏切り者」という言葉と同義だ。「告白者」になるということは、自分の罪を告白し、敵に寝返る、ということだ。

物語は三月二一日ネヴロスの日に、主人公が過去（山での日々と山へ行く前の日常）と現在を行ったり来たりしながら自身の心情を独りごちる形で進行する。

ネヴロスは三月二一日に春の訪れとともに抵抗、闘争、自由を願うクルド人たちの間で盛大に祝われるお祭りである。クルド人やイラン人が古くから祝ってきた春の祭典であるネヴロスは、トルコ人にとってはそれほど大した意味は持たない。トルコ語では Nevruz と書かれ、クルド語では Newroz と書かれるが、サマンジュは Newroz を選択している。トルコ語には「W」の文字は存在しないため、Newroz という表記は長らくタブーだった。

ネヴロスという、クルド人にとって一番晴れやかな日に、膿を垂れ流すかのような主人公の心情告白をもってくるという、このコントラスト。かつては主人公も参加していたという、クルディスタン最大の祭典は、自由と民主主義を渇望するクルディスタンに生きる人々が、外に向けて、そして

互いに向かって一年で最も自らの声を高らかに響かせる日である。祭典は異様な熱気を帯び、ネヴロスには多くの逮捕者も出るのが常である。（主人公も「警察は来ないのか？」と訝しがっている。）

トルコにおけるクルド文学の金字塔、メフメッド・ウズンの代表作である『愛のような光　死のような闇』（Aşk gibi aydınlık Ölüm gibi karanlık, 一九九八年）という長編小説でも、女性主人公はゲリラとなって山に入る。しかし、ウズンの女性主人公は美貌と知性を備え大学で文学を専攻する学生である。彼女が山に入るのは好きな男を追ってのことだ。「知的で美しい女性ゲリラ」という設定に私は鼻白む思いがしたのだが、サマンジュの女性ゲリラは美貌とも知性とも、さらには富とも縁のない、ないないづくしの女性だ。しかも、今や正気も失いつつある。

サマンジュはそれにしても主人公を徹底的に醜く、不幸に描く。顔も性格も醜く、親からも好かれず、友には裏切られ……。裏切られたにも関わらず、美しい友に嫉妬し、かつ彼女の友情を渇望する。サマンジュの筆は、どこまでも容赦がない。また、話が二転三転する展開から、主人公の混乱ぶりが伝わってくる。過去を回想していたかと思うと、目の前の祭りのことに話がうつってしまう。彼女のさまよう心や閉そく感に満ちた日常がこちらに迫ってくる。

実は、サマンジュの長編小説『ハラブジャからの恋人』（Halepçe'den gelen sevgili, 二〇〇九年）でも、数年の年月が経過し地理的にも大幅に移動しているのに、改行もないまま書きつづられているということが散見された。どんなに想像力をフル稼働させても追いつけない箇所があり、結局は物語の全体像がぼんやりとしか見えなかった。しかし、この短編を翻訳するにあたって再び読み込んでみると、サマンジュの改行のない文章は、主人公の混乱した頭の中を表現するための、文学的技巧なのではないかと思えてきた。

特に、物語の最初のほうでは比較的尋常だった主人公が、後半になるにつれて、加速度的に狂気に支配されていく様が、「改行のない文章」のおかげで際立ってくるのである。さらに、物語は外での祭りの様子と主人公の心情がシンクロしており、読者は外の熱狂と主人公の狂気が共振している様を追っていくことになる仕組みになっている。

ところで主人公はどうして山に入ってゲリラになったのだろう？ ベリヴァンにそそのかされたにしても、そそのかされるだけの材料があったはずなのだが、それは物語には描かれていない。

この短い物語からわかるのは、彼女は決して政治的な強い信念があったのではなさそうだ、ということだ。この主人公には政治に意識的な様子はない。山に入る。それはすなわち、クルド人にとって「国の軍隊と闘う戦士となる」ということだ。村八分にされている上に家族にも邪険にされ、彼女は一体これからどのように生きていけばいいのか。本人は結婚するつもりでおり、ウエディングドレスを縫うと言ってはいるのだが、そのドレスに袖が通される日はくるのか？

ネシェ先生は「来年、市民訓練校に行きなさい」と言った。主人公は日本の中学にあたるところまでは学業を修めたが、その後は経済的理由で学校を続けられなかったのだろう。教師は遠方へ赴任させられることがあるので、もしかしたらネシェ先生は西部から来た正義感の強い女性教師（「ネシェ」という名前から女性であると判断）なのかもしれない。勉強も続けられず、結婚相手

も見つかりそうもない、家では邪険にされる。少しも希望の見えない日常の中でベリヴァンが適当なことを言って彼女を山に誘ったのかもしれない……。

一番簡単な方法は、「セイトハンを追いかけて山に入れ」とそそのかすことだ。「撃たれ」て「死体が発見された」のだとしたら、セイトハンがゲリラとなって山に入っていた可能性は極めて高い。

しかしなぜ、ベリヴァンは主人公を追い払いたかったのだろう？主人公の言うように、先に結婚されるようなことがあれば、自分の自尊心が傷つくことが許せなかったからか？

ゲリラとして山に入る女性は男性に比べたら少ないにせよ、相当数いる。女性ゲリラのリクルートも行われていることだろう。「告白者」の主人公のように、十分な教育も受けられなければ家も貧乏、男を虜にするような美貌も持ち合わせていない女性が、好きな男の名前をちらつかされて山に入る、というシナリオも、なきにしもあらずではないだろうか。

ちなみに、短編小説集『沈黙の陰で』は、小説『恐怖の川で』(Korkunun Irmağında, 二〇〇四年)と並んで作家本人が重要視する作品である。中でも主人公の心の声で構成された「告白者」はお気に入りで、映像作品化を試みたい作品であるという。

☙

サマンジュは現在、トルコ語と母語であるクルド語の二言語で並行して著作活動行っている。同化と弾圧にさらされてきたクルド語だからこそ、書かれ、読まれなければならない。クルド語で書くこと／読むことは、クルド語を死の淵から救い出し、命を吹き込み、この世に蘇らせることと同義だ。

最近では、特に若手作家の中にクルド語で書く作家が増えているというが、母語であるクルド語で書くこと、そして文学に耐えうるクルド語を構築していくことは、クルド人作家として火急の任務であるだろう。

小説家としてサマンジュがこだわるのは、クルディスタンで生起する人間ドラマを、クルディスタンの内側から描き、物語へと転換させることだ。コルジュとの敵対関係、軍や憲兵にいつ連行されるかわからない日常、強制移住、封建的な社会における女性たちの闘い、ゲリラとなり山に入る人々……。これらは日本の読者だけでなく、大多数のトルコ人にとって「あちら側の出来事」と言えるような話である。

サマンジュはトルコにおけるクルド文学の担い手として、今後も大いに活躍が期待されるほとんど唯一の女性作家である。しかし、トルコの文壇でベストセラー作家とは言えず、複数の新聞に寄稿する記事を抜きに、文学だけで生計を立てていけないことを嘆いている。

「ディヤルバクルの地から作家として出発するのは決して簡単なことではなかった」と強調しながらも、「クルディスタンの大多数の人々の経験を思えば、私の経験など痛みとは言えず、個人的な痛みを語ることは憚られるのです」（私信より）と語る。

サマンジュは、持ち前の勇敢さを武器に、途方もない痛みが渦巻く日常の中で、自由と民族の権利を渇望する名もなき人々の物語を紡ぎ続けるだろう。世界にとって、いや、トルコ人にとってもいまだ他者であり続けている、クルド人たちの物語を。